

降　　る　　よ　　う　　な　　星　　空

登場人物

星川ひかり　（シホ）
木谷みどり　（ロンリイ）
水木沙也香　（ウィンディー）

金田一明子　（魔女）
火野梨花　　（夜の博士）
土屋真紀　　（プレアデス）
海野　　渚　（ヒアデス）

占い師を演じる生徒
先生を演じる生徒
渋谷を演じる生徒

星川　　^{いさむ}勇

※（　）内は劇中劇での役名

AM10:00

●劇中劇『降るような星空』フィナーレ

十月のある土曜日、七つ森文化会館のホールに音楽が流れ始める。そしてその音楽とともに緞帳が上がる。

舞台上には『降るような星空』を上演したメンバーが様々な衣装を着て一列に並んでいる。創作劇『降るような星空』のフィナーレが行われようとしている。

ひかり 本日は長い間私たちの劇をご覧くださいまして、誠にありがとうございました。

『降るような星空』いかがでしたか。気にいっていただけたでしょうか。もし、よろしかったら、今晚夜空を眺めてみてください。きっと今日出てきた星たちが優しい光を投げかけてくれるはずです。温かい拍手、声援本当に、

全員 ありがとうございました。

そこに魔女の格好をした明子が飛び込んてくる。

明子はフィナーレの列に強引に割り込み、突然ひざまずいて泣き出す。

明子 (泣きながら)ありがとうございました。ありがとうございました。

音楽が盛り上がる。

暗転

ひかり 御苦勞様。

その言葉とともに音楽はカットアウトとなり明かりがつく。

ひかりが泣いている明子に話しかける。

ひかり ちょっと、明子、フィナーレの練習で泣くことないでしょ。

明子が笑って立ち上がる。

みんなが笑う。

ひかり どうしたの。一時間の遅刻じゃない。

明子 ごめん、雨がすごくてさ。

ひかり しっかりしてよ、これから本番なんだから。

沙也香 髪、びしょびしょじゃない。

明子 外の雨、半端じゃないよ

沙也香 台風が近づいてっからね。

明子 これじゃ誰も劇見に来ないよ。

ひかり 大丈夫。天気予報で台風が上陸する可能性は少ないって言ってたもん。東にそれる。
大丈夫。

沙也香 それ昨日の天気予報でしょ。今朝の天気予報じゃ、上陸する可能性が高くなったって言ってたよ。

ひかり でもそれ夜遅くの話でしょ。午後の本番は大丈夫。

沙也香 でも、もし…

みどり ねっ、今、台風の心配したからって、進路が変わるわけじゃないし、練習しない。

沙也香 …

ひかり そうね。それじゃ最後の通し練習するから第一幕の準備して。

みんな、準備をする。

ひかり （舞台を見回して）これが本番前の最後の通し。気合い入れていこう。

みんな （それぞれが返事をする）

ひかり 緞帳下ろしてくれる。

緞帳が下りる。

ひかりの声 場内アナウンス入れて。

アナウンス担当 はい。これより上演いたします劇は星川ひかりによる創作劇『降るような
星空』です。どうぞ御ゆっくりお楽しみください。

●劇中劇『降るような星空』 第一幕「夜の博士」

音楽とともに劇中劇『降るような星空』のリハーサルが始まる。

このリハーサルでは、場面転換が全て堂々で行われる。

転換の間、台詞は止まらない。舞台道具はあくまでイメージであり、劇中のト書きで指示があるトイレや飛行機などを具体的に用意する必要はない。※道具を用意する場合は、抽象的イメージを創り出せるもので、置き方を変えることで全ての場面に使える素材が望ましい。

緞帳が上がると、舞台中央でシホ(演じるのはひかり)が一人で泣いている。

泣いているシホの前にけだるいイメージの少女が現れる。

ロンリイ(演じるのはみどり)である。

ロンリイ あんた、そんなところでどうしたの。何で泣いてるの。

シホ （夜空を指差して）星が、星がどこかに行ってしまったの。

ロンリイ 星？

シホ 病気の弟が星が見たいと言っているの。勇、今、独りぼっちで寝てるわ。

ロンリイ 独りぼっちか…、独りぼっちって寂しいもんなんだよな。
シホ あなたも独りぼっちなの。
ロンリイ ああ、誰からも相手にされなくて、ぐれちまってこのざまよ。
シホ 私も独りぼっち。でも私、お空に星が輝いていれば、独りぼっちでも寂しくない。
ロンリイ 星か…。もしあの日、夜空に星が輝いていれば、あたしもこうはならなかったかもしれない。
シホ あの日って？
ロンリイ いいんだ…もう。
シホ …
ロンリイ 行こう。
シホ …
ロンリイ 星を探しに。
シホ 星を？
ロンリイ ああ。
シホ 私たち、これで独りぼっちじゃなくなるわね。
ロンリイ …名前は？
シホ シホ。
ロンリイ シホ…、星の反対か。
シホ そういえばそうね（笑う）。
ロンリイ あたしはロンリイ。よろしく。
シホ よろしく。
ロンリイ さあ、行こう。
シホ あてはあるの？
ロンリイ （首を振る）。どうにかなるだろ。

ロンリイはシホを連れて客席に下りて行く。
照明は二人が持っている懐中電灯の明りのみ。

シホ （観客に）すいません。星がどこに行ったか知りませんか。
ロンリイ （観客に）すいません。星がどこに行ったか知りませんか。
シホ （観客に）すいません。星がどこに行ったか知りませんか。
ロンリイ すいません。好きな人は誰ですか。
シホ 何を聞いているの。
ロンリイ いや、ちょっと。
シホ 真面目にやってよ。

そのとき突然客席の中から声をかけられる。

声 ちょっと、その人。その人。
シホ 私たちのことですか。

声　　そうだ。おまえたちだ。

　　そうって声の主が客席から立ち上がる、その人はみすぼらしい身なりをした占い師である。

占い師　あなたがた、星をお捜しだね。

ロンリイ　どうしてそれを、

占い師　わかったのかというのかい。私の占いに、今日ここに星を捜している二人組が通るとでていたのさ。

ロンリイ　あんた占い師？

占い師　さよう。あなたがたにこれをあげよう。

　　そうってぼろぼろの紙を渡す

ロンリイ　何これ？

占い師　地図だよ。

シホ　地図？

占い師　その地図に×印がついているだろう。そこにお行き。

ロンリイ　×印のところには、何があるの？

占い師　夜の博士の館だよ。

ロンリイ　夜の博士の館？

シホ　そこに行けば星に会えるの？

占い師　そこには夜の博士がいる。博士に会えば道は開ける。

ロンリイ　夜の博士って誰？

占い師　会えばわかる。さあ、急ぎなさい。

　　二人は、地図を見ながら客席を歩きだす。

　　明かりは二人が照らす懐中電灯のみ。

　　二人が客席から舞台に上がっていく。

ロンリイ　（地図を食い入るように見て）ここが、夜の博士の館ね。

シホ　なんか不気味な建物ね。

ロンリイ　何か書いてある。

シホ　読んでみて。

ロンリイ　七つ森中学校。なんだこれ、うちの学校じゃない。どうして、あたしの学校が夜の博士の館なの。

シホ　とにかく中に入ってみない。

ロンリイ　学校嫌いのあたしが夜まで学校に来るとはね。

　　暗闇の中を懐中電灯を照らしながら歩く二人。

暗闇の中に二人の靴音が響く。

シホ （突然）ロンリイ。（ロンリイに耳打ちする）

ロンリイ トイレ！どうしてこんなときに。

シホ しょうがないじゃない。

ロンリイ （懐中電灯を下から自分の顔に当てて）この学校のトイレは、夜恐ろしいことが起こると言われているんだ。

シホ どんな恐ろしいことが起こるの？

ロンリイ あたしの友だちのさおりが、夜、こっそりこの学校に忍びこんでトイレに入ったときのことだ。

シホ 何でわざわざ夜忍びこんでトイレに入るの。

ロンリイ あいつは、夜になるとどうしようもなく学校のトイレに入りたくなるそんな個性的な奴なんだ。

シホ それって個性なの。

ロンリイ 話は最後まで聞きな。いいか、さおりがトイレに入ったとき、恐ろしいことが起こった。

シホ 恐ろしいこと…

ロンリイ さおりは二階の女子トイレに入った、しかし出るときにはそこが男子トイレになっていたというんだ。

シホ 怖い…

ロンリイ だからトイレは後。

シホ でも…。

ロンリイ しかたないな。それじゃ、あたしは外で待ってるから気をつけていくんだよ。

シホは女子トイレに入り、男子トイレから出てくる。

シホ （ロンリイの後ろから）ロンリイ！

ロンリイが振り向く。

ロンリイ シホ。そこは男子トイレ…

シホ …

ロンリイ やっぱりさおりの言ったことは本当だったんだ。

シホ 学校っておかしなところね。

ロンリイ 昼間はこうじゃないんだ。

シホ この教室から開けましょう。

ロンリイ ここは開けちゃいけない。

シホ 何で。

ロンリイ ここはだめだ。いやな予感がするんだ。

シホ なぜ。

ロンリイ ここ、あたしのクラスなんだよ。

シホ …（恐る恐る）開けるわよ。

ロンリイ どうなっても知らないよ。

シホが教室のドアを開ける動作をする。

舞台が明るくなる。

そこでは英語の授業が行なわれている。

机に座っている一人の生徒(渋谷)。

先生がロンリイに向かって。

先生 ロンリイさん、席について。

その言葉にロンリイがその中吸い込まれるようにその世界に入っていく、席に着く。

先生 She is an English teacher I like very much. さてこの訳はどうなるでしょう。渋谷さん。

渋谷 彼女は私が大好きな英語の先生です。

先生 よくできましたね。次の問題は、ロンリイさんね。I am Alice. これを訳してみてください。

ロンリイ もう一度言ってください。

先生 I am Alice.

ロンリイ 私は一匹のリスです。

渋谷が笑う。先生までさんざんばかにして笑う。

ロンリイの目の色が変わる。

ロンリイ 上等だぜ。（この言葉に二人が凍りつく）

先生 ロンリイさん、今何て言ったの。

ロンリイ 上等だぜ。

先生 ロンリイさん。

ロンリイ よくも笑ってくれたな。

先生 ロンリイさん、それは誤解よ。

ロンリイ 五階？ここは二階なんだよ。（渋谷に）そんなにおかしかったか？

渋谷 そんなつもりじゃ…

ロンリイ 上等だぜ。

先生・渋谷 …

ひかり はいここで実際は暗転になります。みどり、理科室を作ってる間に、ロンリイの台詞言ってくれる。

みどり うん。

次のロンリイの台詞の中、堂々と舞台転換が行われる。
教室は理科室に。

ロンリイ あの日への帰り道、心の中にぽっかり大きな穴があいて、思わず夜空を眺めたっけ。
あの時もし星が一つでも輝いていたらあたしの人生、変わっていたかもしれない。
シホ さっきのロンリイ、本当のロンリイじゃない。今の優しいロンリイが本物よ。
ロンリイ 嬉しいこと言ってくれるじゃない。
シホ ねっ、あそこ、電気がついてる。
ロンリイほんとだ。あれは、理科室。

二人がそこに近づいていく。

シホ 開けるわよ。

シホがドアを開ける動作をする。
舞台中央に白髪頭で眼鏡をかけた一人の老人が座っている。

シホ あそこに誰か座ってる。
ロンリイ あれうちの先生じゃないぞ。
声 誰じゃ？

二人は恐る恐る中に入る。

シホ あなたは…
夜の博士 私かい、私は夜の博士。
シホ あなたが…
夜の博士 ここに何をしに来た？
シホ 星を捜しに来ました。
夜の博士 星じゃと？
シホ 博士。星はどこに行ってしまったの？
夜の博士 人間の目に見えた星のほとんどはこの地球上にいるよ。
ロンリイ 地球上に！
シホ どうやって捜せばいいんですか。
夜の博士 傘を目印にすののじゃ。
シホ 傘？
夜の博士 そう、傘。星は傘をさしている。その傘が星の魂なの。夜空での光はその傘が出ているのじゃ。
シホ 傘をさしている人は星なの。
夜の博士 いや。傘をさしている人の中に星が紛れているのじゃ。
シホ その星を捜し出せば夜空に星が戻るのね。

夜の博士 それがそう簡単にはいかんのじゃ。

ロンリイ どういうこと。

夜の博士 星は「星が見たい」と願う人の心がないと輝けないんじゃ。

シホ 「星が見たい」と願う人の心？

夜の博士 そう。傘は鏡の働きをしていると考えたらいいじゃろう。星が見たいという人の心を反射して光にする、傘はそんな働きを持っているじゃ。人々が心の底から「星が見たい」と願えば星は必ず夜空に戻ってくる。けど、「星が見たい」と願う人の心を奪い集め、夜空に星を戻すことを妨げようとする邪悪な存在があるのじゃ。

シホ 邪悪な存在って…

夜の博士 空の魔女。

シホ 空の魔女？

夜の博士 そう、空の魔女、みよちゃん。

シホ・ロンリイ みよちゃん？

夜の博士 （うなずいて）みよちゃんに打ち勝ち、「星が見たい」と願う心を取り戻さなければ星は夜空に戻ってこない。

シホ どうやったらみよちゃんに勝てるの？

夜の博士 みよちゃんの弱点は帽子じゃ。それを取ればみよちゃんは力が出せない。

シホ 帽子…

夜の博士 （うなずく）さて、もう夜も終わりだ。私はこれで失礼するよ。

夜の博士は赤い傘を取り出す。

シホ その傘。

夜の博士 昔の人は私のことを「夏日星」と呼んだ。あんたがたには火星といった方がわかりやすいかな。

シホ お願い、夜空に戻って。

夜の博士 私だって戻りたい。しかし、私だけの力ではどうにもできんのじゃ。私のような年寄りが夜空に輝くには、百万もの人が「星が見たい」と願わねばならんのじゃから。

シホ 私が「星が見たい」と願う心を取り戻すわ。博士のために。

夜の博士 ありがと。あんた、優しいね。名前は？

シホ シホです。

夜の博士 いい名前だ。シホちゃん、あんたにこれをあげよう。

そう言って赤いリボンを渡す。

シホ これは？

夜の博士 それは幸せを呼ぶ赤いリボンじゃ。

シホ 幸せを呼ぶ赤いリボン？

夜の博士 つけてごらん。

シホがリボンを髪に結ぶ。(観客に背を向け、後ろに長く伸ばし一つに束ねられた髪にリボンを結ぶのが望ましい)

シホ 似合う？

夜の博士 ああ、とっても。

シホ 博士、ありがとう。

暗転

AM10:30

ひかり はい、そこまで。御苦勞様。

明かりがついて、みんなの緊張が解ける。

ひかり 沙也香。二幕の準備は。

沙也香 ばっちり。

明子 が現れる。

明子 外の雨さっきよりすごくなってる。

みどり 大丈夫かな。

ひかり 大丈夫。上陸の可能性は少ないんだから。きっと東にそれる。場内アナウンス入れて。

アナウンス担当 はい。「これより、『降るような星空』第二幕を上演いたします。どなた様も、お席についてお待ちください」

●劇中劇『降るような星空』第二幕「空の魔女」

プロペラの飛行機が着陸する音。

明かりがつくと、飛行機の上にウィンディー(演じるのは沙也香)がプロペラを表わす骨だけの傘を持って立っている。

シホとロンリイの二人が舞台に現れる。

シホ ウィンディーってあなた？

ウィンディー そうだけど。

シホ 私、シホ。

ウィンディー 何か用？

シホ 願いがあるの。

ウィンディー 何？

シホ 私を空に連れて行って。

ウィンディー 空に…お金はあるの？

シホ （首を振る）

ウィンディー お断り。私、あんたの遊びにつき合うほど暇じゃないの。

シホ 遊びじゃないわ。

ウィンディー じゃ、何しに空に行くっていうの？

シホ 魔女を倒しに。

ウィンディー 魔女を。何でそれを私に頼むの？

シホ 魔女は雲の中に住んでいるそうなの。魔女の住む雲の中は未知の世界で、その中を飛ぶには天才的な飛行テクニックが要求されるんですって。そんな天才的飛行テクニックをもっている人間は、ウィンディーただ一人だって。

ウィンディー 魔女と戦うのは誰？

シホ もちろん（そうやってウィンディーを指差す）。

ウィンディー 魔女を倒すと何かいいことがあるの？

シホ 魔女が盗んだ「星が見たい」と願う心が人々に戻ってくるわ。そうすればまた夜空に星を見ることができる。勇にも降るような星空を見せてあげられるわ。

ウィンディー 勇って誰。

シホ 私の弟。重い病気なの。星が見たいという気持ちが生きる支えになってるの。

ウィンディー 星か。あんたら、飛行機から星を見たことあるかい。

シホ （首を振る）

ウィンディー 様々な宝石が空いっぱいの黒曜石の壁にはめ込まれているんだ。

シホ …

ウィンディー 乗んなよ。

シホ 連れてってくれるの？

ウィンディー （うなずく）

シホ あ、ありがとう。

ウィンディー 感謝なんかしないでいいんだよ。私も星が見たくなっただけなんだから。それと、お金は払ってもらうんだよ。

シホ …。

ウィンディー 勇君の病気が治ったら。

シホ はい。必ず。

ウィンディー （シホに）さあ乗って。

シホとロンリイの二人が乗ろうとする。

ウィンディー （ロンリイに）この飛行機は二人乗り、あんたは乗れないよ。さっ、それじゃ飛ぶよ。危ないからあんたは下がってて。

シホ ロンリイ…

ロンリイ シホ、しっかり…

シホ （うなずく）

ロンリイが舞台の上手にさがる。
ウィンディーが骨だけの傘をまわす。エンジンそしてプロペラ音。
飛行機の離陸音。

シホ 飛んだ。飛んだわ。
ウィンディー しっかりつかまってなよ。
シホ わー、みんなどんどん小さくなっていく。
ウィンディー あんたのうちはどこにあるの？
シホ あのビルよ。
ウィンディー あのビルのどこ。
シホ 九十九階のあの部屋。
ウィンディー ずいぶん高いところに住んでるのね。
シホ あそこで勇が私の帰りを待っている。待ってて、必ず星を捜して帰るから。
ウィンディー さて、それじゃ、仕事にかかるとするか。
シホ あては、あるの？
ウィンディー ない。
シホ どうやって捜すの？
ウィンディー 風に聞くの。
シホ 風に？
ウィンディー そう。風ってのはね、友だちになれば何でも教えてくれる。さあ、こうやって手を広げてからだ一杯に風を浴びてごらん。

風の音

シホ わあっ、気持ちいい。
ウィンディー 風に魔法の居どころを聞いてごらん。
シホ 風さん、魔法がどこにいるかを教えてください。風さん、魔法がどこにいるかを教えてください。

風の音

ウィンディー どう、風の声が聞こえた？
シホ (首を振る)
ウィンディー 耳で聞こうとしちゃだめ、心で聞くの。
シホ 風さん、魔法がどこにいるかを教えてください。風さん、魔法がどこにいるかを教えてください。

風の音

シホ　なんか、こっちからの風を浴びると胸の中が凍りつくよう。

ウィンディー　確か。

シホ　（うん）。

ウィンディー　魔女がいるのはそっちの方向ね。

シホ　あそこにあるすごく大きな雲。あの中から冷たい風が吹いてくる。

ウィンディー　魔女の住んでいるのはあの雲の中。さあ、雲の中に入るよ。

雲の中に突入する効果音と共に舞台が暗くなる。

シホ　雲の中に陸がある。

ウィンディー　降りてみよう。

飛行機が着陸する。

ウィンディー　シホ、気をつけて。

二人は魔女を探しに行く。

舞台が明るくなると、そこにはとらわれの身となっている二人の少女が。

シホとウィンディーが舞台上に現れる。そして二人の少女に気がつく。

二人の少女(プレアデスとヒアデス)は手に傘を持っている。

シホ　どうしたの？。

プレアデス　誰？

シホ　私はシホ。

プレアデス　あなた人間ね…

ヒアデス　人間…

シホ　はい。

プレアデス　人間がどうしてここに来たの。

シホ　魔女が盗んだ「星が見たい」と願う人の心を取り戻しに来たの。

プレアデス　星？

ヒアデス　私たちのこと？

シホ　…、あなたたち…(傘に気がついて)、傘…、そうだ、博士が言ってた。星は傘を持っているって。あなたたち星なの。

ヒアデス　うん。私はヒアデス、そしてお姉ちゃんのプレアデス。

シホ　誰があなたたちのことを…

プレアデス　魔女。

シホ　魔女って、みよちゃんのこと？

ヒアデス　みよちゃんを知っているの？

シホ　博士が言ってた、恐ろしい魔女だって。

ヒアデス　おねえちゃん、さっき「星が見たい」と願う人の心を取り戻しに来たっていって

たでしょ。どうやって取り戻すの？

シホ みよちゃんを倒すの。

プレアデス 魔女みよちゃんとどうやって戦うの。みよちゃんは魔女の剣を持っているのよ。

ウィンディー 魔女の剣？

プレアデス 何でも真っ二つにする恐ろしい剣。

ヒアデス 私の傘を使って。

プレアデス ヒアデス。傘は私たちの魂。それを渡すってことがどういうことか分かってる？

ヒアデス …

プレアデス 私たちは、傘を手放して三十秒が過ぎると、仮死状態になってしまうの。そう
なれば、最低一年は目を覚ますことができないの。

ヒアデス それでもいいの。私の傘を使って戦って。これなら魔女の剣でも切れないわ。魔
女を倒して。私また夜空に輝きたいの。

ウィンディー ヒアデス、あなたの思い無駄にしない。

プレアデス …、わかった。私も傘を貸す。

ウィンディー ありがとう。それではこうやって戦うことにする。20秒たったら言って。
そしたら傘を交換するの。あなたたちの魂、大切にする。

雷鳴が轟く。それと同時に魔女が現れる。

魔女はほうきと一緒になぜかラジカセを持っている。

ヒアデス・プレアデス みよちゃん！

魔女 おや、見かけない顔だねえ。あんたら何しにここに来たんだい？

シホ 「星が見たい」と願う人の心を取り戻しに来たの。

魔女 冗談だろ。世界中からこれを集めるのは大変だったんだよ。そんな簡単に渡せるかい。
人間は苦勞して集めたものを簡単に盗み出していく。全くずるい生き物だよ。

シホ もともととはあなたが盗んだんでしょ。

魔女 今何て言ったのかな。最近耳鳴りがひどくてね。ともかく私の集めた人の心を欲しが
るところを見ると、あんたらはまだ「星が見たい」と願う心を持っているんだね。それ
ではそれをいただくとするか。

ウィンディー 取れるもんなら取ってごらん。

魔女 ずいぶん勇ましいこと。でも私は魔法が使えるのよ。空の魔女の魔法を。

ウィンディー 空の魔法？どうせたいした魔法じゃないんでしょ。

魔女 言ってくれるじゃないの。

ウィンディー どんな魔法があるの。

魔女 冥土の土産に教えてあげるわ。私の一番恐ろしい魔法、それは空の魔法、美空ひば
り。

ウィンディー 何それ？

魔女 この魔法をかけられた人間は、「川の流れるように」を歌わずにはいられなくなる
のよ。

ウィンディー　ばかばかしい。もっとまともな魔法を使ったら。
魔女　私の魔法をばかにしたね。それじゃあ、その魔法をかけてやる。

魔女がラジカセのスイッチをオンにして「川の流れのように」を流す。

魔女　ええい、空の魔法、美空ひばり。

ウィンディーその魔法をプレアデスから借りた傘ではね返す。
自分の魔法を浴びた魔女は「川の流れのように」を歌い出す。

魔女　いかん、いかん。自分の魔法にかかってしまった。よくもやってくれたわね。

シホ　ウィンディー、魔女の弱点はあの帽子よ。あの帽子を取って。

魔女　私は帽子を取られても平気さ。

ウィンディー　ごまかしてもだめさ。その帽子、いただく。

魔女　そんな手で行くだろうと思って、帽子の下にもう一つの帽子を被ってるのさ。

そう言って帽子を取る。
魔女は帽子の下に黄色い海水帽を被っている。

魔女　どうだ、まいったか。

ウィンディー　情けない魔女だ。

魔女　それでは本気で戦うとするか。風よ吹け。嵐よ吠えろ。稲妻よこいつらを引き裂け。

稲妻が走った。
魔女のところに魔女の剣が飛んでくる。

ヒアデス　気をつけて魔女の剣よ。

ウィンディーと魔女の戦いの幕がきって落とされる。
ウィンディーが「星が見たい」と願う人の心が入っている袋を魔女から奪う。

ウィンディー　この中に「星が見たい」という人の心が入っているのね。さあ、シホ、その袋を開けて。

魔女　せっかく集めた心をどうする気だい。

シホがその袋を開ける。
中から紙吹雪が舞い落ちる。

魔女　おお、私が苦労して集めた人の心が…。ほうきよおいで。

ほうきが飛んでくる。

魔女はほうきに乘って逃げようとする。

ウィンディー 逃げる気。そうはさせないよ。

ウィンディーは魔女のほうきをつかむ、
そして魔女を傘で一突きにしようとする。

プレアデス 待って！

ウィンディー どうして。

プレアデス 思い出したの。

ウィンディー 何を？

プレアデス みよちゃん、あなた私と七十年前に会ってるね。

魔女 何のことだい。

シホ 七十年前？それじゃプレアデスって本当はおばあちゃんなの？

ヒアデス おねえちゃん、私たち一億年以上生きているのよ。

シホ …

プレアデス みよちゃん。あなたの正体がわかった。

ウィンディー 魔女の正体？

シホ 魔女の正体は何なの？

プレアデス 星。

ウィンディー 星！？

シホ 魔女は星なの？

プレアデス ほうき星よ。

魔女が思わずほうきを落としてしまう。

シホ 魔女はほうき星だったの？

プレアデス 助けてやって。

ウィンディー そしたらまた…

プレアデス お願い…

ウィンディー よし、逃がしてやる。今度は宅急便の配達でもやって世の中の役に立てよ。

魔女 余計なお世話だ。

ウィンディーが魔女のことを放すと、ほうきに乘って魔女は逃げ去る。

ヒアデス これで私たちまた夜空に輝けるのね。

プレアデス ヒアデス、「星が見たい」と願う人の心は解放された。でもまだ私たちは夜空
に輝けない。

ヒアデス 何で？

プレアデス 魔女に心を奪われて以来、人間は環境を破壊し続けてきたの。この環境を変えないうちは、私たちの光は人々の目に届かない。

シホ 待ってて、私かならず環境を変えてみせる。

ヒアデス おねえちゃん、私待ってる。ずっとずっと待ってる。

プレアデスがシホに手をさしのべる。シホはその手を固く握る。

ウィンディー シホ、行くよ。

シホ 行くって、どこに。

ウィンディー 地上に。星が見える環境を取り戻しに。

シホ うん。

ウィンディー さあ、乗って。

シホとウィンディーが飛行機に乗る。

飛行機が離陸する。

ウィンディー 何？この風。

シホ ウィンディー！

ウィンディー 嵐で、操縦がきかない。

シホ ウィンディー！

そのとき雷が飛行機に落ちる。

二人の叫び声。

● 劇中劇『降るような星空』ラストシーン

舞台が明るくなるとそこは地上。

シホとウィンディーが舞台中央で倒れている。

二人が目覚めます。

夜空はまさに降るような星空である。

シホ 星だわ。星が夜空に輝いている。なんか手でつかめるよう。降るような星空。これが降るような星空なのね。

ウィンディー 嵐が汚れた空気を吹き飛ばしたのね。

シホ ウィンディー！

ウィンディー これが、降るような星空か。星明りってずいぶん明るいね。

シホ ヒアデス、プレアデス、夜空に、夜空に戻れたのね。

ロンリイがいつの間にかシホの後ろに立っている。

ロンリイ 夏日星が赤く燃えている。博士も夜空に戻れたんだな。

シホ ロンリイ、来てくれたの？ありがとう。

ロンリイ 水臭いこと言うなよ。けど、星ってこんなにきれいだったんだ。なんか、涙が出てきちゃった。

ウィンディー こうしてると、なんか星空に吸い込まれてしまいそう。

三人がうっとり星空を見つめる。

シホ (大声で叫ぶ) 勇、勇、私の声が聞こえる。見てご覧なさい。降るような星空よ。勇の見たがっていた降るような星空よ。

暗転

AM11:00

ひかり 御苦勞様(明かりがつく)。この後のフィナーレはさっき練習したからカットします。

沙也香 ひかり、一つ言っていていい。

ひかり 何？

沙也香 シホが「勇、勇」って大声で叫ぶところ、なんか浮いてない。あれで劇が壊れるような気がするんだけど。

ひかり 叫ばないと声が聞こえない。

沙也香 十分聞こえる。そう思わない。

明子 聞こえるよー。

沙也香 シホって女の子、かわいらしい女の子でしょ？そのかわいらしい女の子があんな風に叫んじゃ、イメージが崩れる。もっとささやくように言って欲しいな。

ひかり …でも、あそこは叫ばないとだめ。

沙也香 どうしても。

ひかり どうしても。演出は私。私の言う通りにして。

沙也香 どうしてそう頑固なの。確かに演出はひかりだけど、この劇を作ってるのは私たちみんななんだよ。

ひかり あそこはあのままやらせてほしいの。

二人がにらみ合う。

梨花が現れる。

梨花 ひかり、責任者の人は事務所まで来てくれって。

ひかり …

ひかりが事務所に向かう。

梨花はひかりと一緒に歩いていく。

沙也香 (ため息)なんかやる気なくなっちゃった。どうしてあー頑固かな。毎日しつこく劇に出てくれって頼んでくるから、しかたなしに出てあげることにしたっていうのに。ラストシーンくらい私の意見を聞けっての。

明子 何が、「叫ばないと声が聞こえない」、だよな。人一倍大きな声して。

沙也香 ひかり四月にこの学校に転校してきたんだよ。普通、はじめはおとなしくしてるものじゃない。来てそうそう劇をやりませんかだもん。どうかしてるよ。

みどり 影でひかりの悪口言うのやめない。

その言葉に一瞬場が凍り付く。

明子 さすが優等生。

みどり 何それ？

明子 だから優等生かなって、そういうこと言うのって。

みどり そういう言い方やめてくれない。

沙也香 みどり、みどりはひかりにずいぶん演技直されてるじゃない。気分いい？いやでしょ？

みどり 優等生って言われるほうがいや。

明子 どうして。優等生だから、優等生って言うただけ。みどりが優等生じゃなかったら優等生なんてどこにもいなくなっちゃうじゃない。

みどり 私、優等生なんかじゃ…

明子 知ってるよ。この前の試験でずっと学年一番を守り続けてきたゆき絵のこと破って一番になったんだよね。

沙也香ほんとに。

明子 うん。学年一番だよ。学年一番は優等生でしょう。

みどり 明子、もうやめて、馬鹿にするの。

明子 何で？馬鹿になんかしてないじゃない。馬鹿って言ったんじゃないんだよ。優等生って言ったんだよ。

みどり それって馬鹿にしてるでしょ。

明子 してないよ。してるわけじゃない。あたしみたいな馬鹿がさ、みどりみたいな優等生を馬鹿にできるわけじゃないじゃない(笑う)。

みどり (明子の笑いを打ち消すように)上等だぜ…。

この言葉に場が凍り付く。

沙也香 みどり…

みどり 私、ロンリイの気持ち、少しわかったかも。

明子 …

沙也香 みどり…、私、みどりの気持ち、少しわかったよ。

みどり …

沙也香 私の気持ちもわかってくれる。少しでいいから。

みどり …

沙也香 私、あのラストだけは引けない。この劇はひかりだけの劇じゃないよね。私たちの劇だよね。だからあのラストシーンだけは叫ばないでやってもらう。絶対。

そこに、ひかりが戻ってくる。

沙也香 ひかり、

沙也香がひかりに近づいたその時、突然、ひかりが泣き出す。

沙也香 ひかり…

ひかり 劇、中止にしろって。

みんな …

ひかり 台風が上陸しそうなんだって。

沙也香 台風が…。

ひかり 三十分後にホールを閉めるからみんな帰ってくれって。

みんな …

ひかり 中止にするなんてできない。

みんな …

ひかり 何のための練習だったの。今までの苦労は何だったの。

梨花が現れる

梨花 ホールの人が、すぐここから出てくれって。今このあたりに、大雨洪水警報が出たって。

沙也香 大雨洪水警報、それやばいんじゃない。

明子 あーあ、中止か。

ひかり いや！中止にするなんてできない！

沙也香 じゃどうするの…

みどり ひかり、また次の機会にやろう。だからそんなに泣かないで。

ひかり (泣いている)

みどり ひかり…

沙也香 (みどりの腕をつかんで) ほっときなよ。

みどり …

沙也香 さっ、帰る支度しよう。早くしないと帰れなくなっちゃう。

みんなが帰る準備を始める。

泣き続けているひかり。

心配そうに見つめるみどり。しかしそのみどりも沙也香たちと一緒に帰っていく。

ひかりが一人舞台に残る。

暗転

嵐の音が響いてくる。

PM6:00

明かりがつく。

そこは水木沙也香の部屋。

沙也香は部屋の中でくつろいでいる。

外は暴風が吹き荒れているようだ。その音が部屋の中まで聞こえてくる。

沙也香の携帯電話が鳴る。沙也香が電話に出る。

それは星川ひかりの母からの電話である。

沙也香 はい。(電話をひかりからだと思って)ひかり?(あっ)ひかりのお母さんでしたか…。

はい、水木沙也香です。(ひかりの母の言葉)…えっ、ひかりまだ帰ってないんですか。

(ひかりの母の言葉)…ええ、解散したのはホールです。だいたい十一時半くらいだったと思います。それからはみんなばらばらで。(ひかりの母の言葉)…私たちと別れたときの様子ですか。中止ということにすごくショックを受けて、どうしても劇をやるんだって泣いてました。私たちもショックでしたけど、ずっと演劇をやってるひかりのショックは私たちとは比べものにならないようで。(ひかりの母の言葉)…えっ、そうなんですか。

ひかり、劇をやるの今回が初めてなんですか。(ひかりの母の言葉)…いえ、知りませんでした。みんなも知らないと思います。(ひかりの母の言葉)…はい。はい。…わかりました。私からみんなに電話してみます。何かわかったら電話しますから。

沙也香が電話を切る。

沙也香はしばらく呆然としている。

そして携帯電話を使って電話をかける。

沙也香 もしもし、みどり…

暗転

嵐の音が響き渡る。

明かりがつく。

沙也香が携帯電話で星川家に電話をかけようとしている。

沙也香 あっ、星川さんのおたくですか。私、水木と申しますが…。(ひかりの母の言葉)あっ、お母さんですか。誰も、一緒じゃなかったみたいです。ホールは捜しましたか。(ひかりの母の言葉)警察で…。(ひかりの母の言葉)そうですか、全部鍵がかかってたんですか。お母さんは何か心当たり、ないんですか。(ひかりの母の言葉)…そうですか。一つ伺っていいですか。ひかりがこの劇を始めたのはなぜですか。(ひかりの母の話を聞き

ながらだんだん沙也香の顔色が変わっていく) …そう、そうだったんですか。それで『降るような星空』っていう劇を。そんなわけがあったんですか…。(我に返って) あっ、見つかったら電話ください。失礼します。

電話を切った瞬間、停電となる。

沙也香 停電。

嵐の音が響き渡る。

沙也香 ひかり、何で今まで話してくれなかったの。

嵐の音が響き渡る。